

2017年8月6日 主日礼拝説教（要旨）

聖書 ルカによる福音書 20章 45節～21章 6節

説教 「何を見ているのか」 日本キリスト教会鶴見教会 牧師 高松牧人

受難週の初め、神殿境内で教え、質問の受け答えをしておられた主イエスは、続いて、律法学者のあり方をきびしく非難し（20：45～47）、一人の貧しいやもめの献金を評価し（21：1～4）、絢爛豪華なエルサレム神殿に見とれる人たちに神殿の崩壊を予告されました（21：5～6）。これらは別々の主題が扱われているのですが、それらを買いて、いったい何を見ているのかという、私たちへの問いかけがなされています。

まず、律法学者に対する非難ですが、彼らの問題点が簡潔に指摘されています。律法学者とは聖書の専門家であり、聖書の言葉を基に人々の信仰生活を指導していた人たちです。彼らは世俗化する社会の中で、信仰的な生き方を真面目に追求し、神の言葉にひたすら忠実であろうとした人たちです。彼らは、今でいえば弁護士や民生委員のように、弱い立場の人々や困難を覚える人々の生活と権利を守るためにも働きました。だから、人びとは律法学者をラビと呼んで尊敬し、お世話になった人たちは貧しい中からお礼をしたりもしていたのです。

しかし、神の言葉に従う献身的な奉仕が、いつしか人々に評価されほめられるためのものになり、それを期待するようになっていったのです。人々にどう思われるか、どう認められるか、人の目を気にする生き方になっていったのです。そこに見せかけの長い祈りをはじめとする偽りの敬虔さや偽善が生じてきたのです。

これは律法学者だけの問題ではありません。信仰に生きる私たち一人一人も陥りがちな誤りではないでしょうか。信仰生活とはただひたすら神の目の前に生きることです。神のまなざしではなく、人の目に捕らわれてしまうとき、私たちは自らを飾り、表面を装うようになります。そのとき信仰生活は窮屈で不自然なものに変わっていくのです。

一方、ある人たちがエルサレム神殿の見事な石と奉納物で飾られた建物の様子を見て感嘆の声をあげていました。当時のエルサレム神殿は、あのヘロデ大王が自らの威信をかけて何十年にもわたって改築をしてきた建物でした。マルコによる福音書では、弟子の一人が「先生、ご覧ください。なんとすばらしい石、なんとすばらしい建物でしょう」（13：1）と主イエスに語りかけたとあります。

目に見える建造物は人々を魅了し、高ぶらせ、偽りの安心感を抱かせます。神殿があるから自分たちは大丈夫だという誤った信仰を生み出します。本来そこに収めることなどできない永遠で無限の神を、真に崇め、畏れ、喜ぶことを忘れてしまうのです。主イエスは、「あなたがたはこれらの物に見とれているが、一つの石も崩されずに他の石の上に残ることのない日が来る」（21：6）と言われ、威容を誇るこの神殿も神の審きのもとに徹底的に破壊されてしまう日の来ることを予告されるのです。ここでも私たちが何を見つめているのか、何をあがめているのかが問われているのです。

こうした偽りの信仰、見せかけの宗教を警告される中で、主イエスはその危険に満ちた神殿の境内で、誰もが目にも留めることのなかったところに、真の信仰の輝きを認められました。21章冒頭に記されたレプトン銅貨2枚を捧げた貧しいやもめの話です。1レプトンとは当時の成人男性の日当にあたる1デナリオンの128分の1ということですから、2レプトンは本当にわずかですが、彼女にとっては貴重なお金でした。

ところで、主イエスはこの貧しいやもめの献金の何を評価しておられるのでしょうか。「この貧しいやもめは、だれよりもたくさん入れた」、「この人は、乏しい中から持っている生活費を全部入れたからである」と主イエスは言われます。この献金に表されている献身と犠牲の大きさが語られています。けれども、彼女の行為がほめられたことは私たちにとってどういう意味をもつのでしょうか。変な言い方ですが、少しばかり余裕があって捧げた献金は、それほどほめていただけないのでしょうか。生活費全部を入れたとありますが、そんなことが本当にできたのでしょうか。衝動的に全部捧げたなら、ほめていただけるのでしょうか。

この貧しいやもめがどうして献金をしたのか、なぜ全部を捧げたのか、どうしてそんなことができたのか・・・といったことは一切分かりません。ただ、主イエスをご覧になって評価されたのです。確かなのはそれだけです。注意すべきことは、主イエスは彼女の事を見られましたが、彼女は主イエスのことに気づいていませんし、主イエスの評価を聞くわけでもないのです。彼女は黙ってやってきて、黙って捧げ、黙って帰って行ったのです。けれども、まさにここに主イエスの注目して下さったものがありました。人と比べるのではない、人の目にどう映るかでもない、人間的ないっさいのこだわりから自由に神の前に立ち、ただ感謝をもって自分のありのまますべてを神に委ねたのです。ここにただ神の目の前に生きる信仰の輝きがありました。それは律法学者や多くの人々が見失っていた信仰のまなざしでした。

受難週の暗闇に包まれた出来事の中にもう一つきらりと光るような印象的な出来事として、ナルドの香油を惜しげもなく全部主イエスに注ぎかけた女性の話があります。この女の人のことも、彼女の心の秘密も分かりません。だが、彼女も主イエスをひたすら見つめ、自分に今できる精一杯の感謝を捧げたのでした。

レプトン銀貨を捧げた貧しいやもめの話、ナルドの香油を捧げた女性の話、どちらも無名の女の人に関わる話です。主イエスは、すべてを神の御手に委ねた無名の人たちの思いに、ご自身を重ねるようにして、今すべてを父なる神の御手に委ねて、十字架の道へと踏み出していかれるのです。